
ARMS MAKER'S 刃の姫

mick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMS MAKER'S 刃の姫

【Nコード】

N7056Z

【作者名】

mick

【あらすじ】

「最強たるは誰なりしや？」剣術大会で万年二位と誹られ、武器殺しとありがたくない異名を冠するヒロ「ライナードは、ある日ソード・メイカーを名乗る不思議な少女に出会う。その日を境に平和な街では不可解な事件が起き始める。警備師団の団長であるヒロは、わけもわからず事件に巻き込まれていくが……。

プロローグ（前書き）

メリークリスマス企画。

クリスマスに何かできればなあと思い、小説をUPしました。

ダークファンタジーなので、クリスマスらしさはちっともございませんが、

読んでいただけると幸いです。

24日中に、1章全話投稿の予定となっております。

戦闘シーンなど、刺激が強い描写が含まれますので苦手な方はおひかえください。

プロローグ

> i 3 5 0 0 6 | 9 6 5 ^

玉座すわに坐りし王は、疲れたようにつぶやいた。
うつろな目で、ひれ伏す己の血を引く子供らを見つめる。

最強たるは誰なりしや？

いざや始めん、終焉しゆえんの宴を……。
坐すわれる玉座はただ一つ、頂たる王冠もただ一つ。

己の武器を手にとりて、争えや争え。

我が選えらびしはただ一人。

世界の王はただ一人。

最後に大地に立ちし者、その者に我は全てを与えん。

王はそれ以上は何も語らず、玉座から立ち上がり去った。

王の子らも己が武器を手に取り、その場を去った。

それはもう、はるか昔の出来事……。

武器殺しと不思議な少女

剣戟^{けんげき}が響く。

一撃、二撃、三撃……。

怒号のような歓声が上がっているが、まるでどこか遠い世界のようだった。

俺の周りでは世界が静かに流れている。

再び剣が交わり、俺は刃へと目を走らせた。あと何撃持つだろうか？

こぼれた刃は、今にも亀裂^{きれつ}を走らせそうだった。

せめて数撃持てばと思ったが、そう都合良く事が運ぶはずもない。

嫌な音を立てて剣が砕^{くだ}ける。

「……………」

まずいと思ったときには、試合相手の刃がのど元に突きつけられていた。

「勝者つ、カルザス!! マツケローニっ!」

わああつと今日一番の大歓声があがった。勝利を祝う紙吹雪が舞い、カルザスは拳を振り上げ、観客に応えた。

ああ、またなのかと俺はがくりと地面に膝^{ひざ}をつく。

急に俺の耳に、周囲の騒音が戻ってきた。

万年2位のヒイロライナードはまたも記録更新と嘲笑^{ちやう}が聞こえる。大穴で俺に賭けていた観客からは、罵倒^{ばとう}が飛び出す。

俺は思わず叫びそうになったが、ぐつと唇をかねで耐^たえた。

負けたのは事実で、言い訳など口にするのはみっともない。

目を伏せ、未消化のまままで終わった熱を、ため息として吐き出し、折れた剣を拾い上げ、俺は黙って試合会場をあとにした……。

荘厳な石造りの門を出たところで、俺は陰鬱な表情で空を見上げる。

青々とした空と裏腹に、俺の気分は曇天模様。

そんな俺の背に、からから笑いながら年の寄った守衛が声をかけてきた。

「まあ、そう落ち込むなよヒイロ。勝負は時の運と言っじゃないか」「なら、俺はよほど運から見放されてるのだろうな」

今日の公式剣術試合で100連敗だ。

剣の道で生きると決め、街の警備師団へと就職し、時間を作っては剣術試合に挑戦し続けているのだが、結果はことごとくも優勝を逃し続けている。

「せめて、もうちつと良い剣を買って出場できんのかな?」

「それができるなら……とっくにそうしている」

ギロリと睨む俺に、守衛は口をつぐんだ。

守衛に八つ当たりしたところなどするものではないと、俺はぼつが悪く感じて、首を横に振った。

折れた剣を見つめる。この修理費をどう捻出すればいいのかが目

下の問題だろう。

生来実家が貧しいせいもあるが、不景気な世の中というか俺の羽振りぶはそう良くない。

今回の試合とて、優勝賞金目当てという、なんとも俗ぞくっぽい理由で出たというのが現実だ。

「達人は獲物えものなど選ばない。負けたのは俺が弱いからだ。俺の腕が良いならば、剣は折れたりなどせず、相手ののど元につきつけられていたはずなんだ」

ざあっと強い風が俺の黒髪をなぶった。

とぼとぼと、今日の戦いを思い出しつつ市街へ向かう足取りは重い。

決勝戦の相手が強いとは、それほどは感じなかった。

動きは全て読めていたし、剣が折れるまでは事実俺が追いつめていたのだから。

万年二位の他に、俺にはもう一つのあだ名がある。

武器殺しのヒイロ……。

俺が試合に負けている最たる理由。

剣の撃ち合いで負けたのではなく、いつも先に武器が壊れて負けているのだ。

先ほどの守衛だんちやうが言ったように、安物ではなくもつと質の良い剣を使えばと思い、断腸だんちやうの思いで出費したこともあったのだが……。

結果はいつもと変わらない。

「やはり俺の腕が悪いからなのだろうな」

そう結論づけたときだった。
くすくすつと笑い声が頭上から響く。

「解ってないのですね、その貴方。達人は獲物えものを選ばない？」
冗談でしょう。そこそこ腕が立つ程度の半端者だからこそ、選ばずとも良いのです。真に腕が立つ剣士とは、それこそ精密なほどに武器を選ぶ必要があるのです」

ふいにかけられた言葉に俺は驚く。

随分と高慢な物言いだ、聞こえる声はあどけなかった。がさがさと木の枝が揺れ、くるりと枝を掴んで一回転し、しゅたつと少女が地面に軽やかに着地する。

少女は栗色の長い髪を黒いリボンでとめており、上等の紅色のドレスをまとっている。

このあたりでは見ない子供だった。

少女はドレスの裾をちょこんとつまみ、深々と俺に向かって一礼する。醸かもし出す雰囲気ふんいきで、どこぞの貴族の子供なのだろうと俺は苦い顔をした。

「先ほどの試合を見ていました。ほんつとつに無様な試合でしたね」

出会い頭に失礼極まりない言葉だった。

少女はまるで楽しむかのように、猫のようなエメラルドの瞳を細める。

「それはどうも。貴族に対し非礼だとは思いますが、俺はそんなに暇じゃないのでな」

少女を無視し、俺はすたすたと横を通り過ぎた。こつこつに閉
わるとろくな事がない。

去っていく俺を少女は慌てて追いかけて、小走りで付いてくる。

「待つのです！ 人の話はきちんと最後まで聞きなさい。この唐変
木っ」

「きちんと聞いて欲しいならば、貴族と言えど言葉には気をつけら
れよ」

眉をつり上げ憤慨する少女に、俺は立ち止まって真面目な顔で説
教をたれた。

どうにも貴族の子供というものはしつけが悪い。

たまに剣術の指南を依頼され、貴族の家に出向くこともあったが、
そのたびに嫌な思い出しが積み上がらない。

実践向きではなく、教養のための剣術の指南。

ちよつと厳しく指導すれば泣き言を言い出し、わざと負けてやら
ねば機嫌をそこねる。

依頼料だけは破格のため、生活のためと我慢はするが、それ以外
で貴族に関わり合いになりたいと俺は思わなかった。

少女はむつとしていたが、俺の言葉に思うことがあったのだろう。
こほんと咳払いして、お腹の前で指を組む。

「た、確かに貴方の言うことにも一理あるかも……です。
名前も名乗らずでは話にならないでしょうから」

いや、別に名前を聞きたいわけではなく、俺はかまってほしくな
いだけなのだ。

その一方的な態度こそ問題にすべきなのだと思ったが、それはあ
えて指摘はやめておいた。

相手はまだ子供なのだ。同レベルで張り合ってどうする？

俺がしぶしぶ少女に向き直ると、少女は満足げに微笑んだ。

「私の名前はメディア。メディア＝クラインヴェル」

「俺はヒイロ。ヒイロ＝ライナードだ。この街で警備師団の団長をしている」

「知っているのです。武器殺しのヒイロ、飛ばず泣かずのヒイロ……なんともけつたいな異名は有名なのです」
「……………」

ここは一発教育的指導で、この少女……メディアの頭を小突いても良いだろうか？ と俺は思った。

飛ばず泣かずのヒイロ。勝手に変な異名を増やすなど言いたい。むすつと黙り込む俺を無視して、メディアは腰に手を当て、えへんと胸を張って話を続ける。

「始まりの武器精律術師の直系、クラインヴェル家に生まれた私は、稀代のソード・メイカーなのです」

「武器精律術……ソード・メイカーだと？」

唐突に意味不明な単語を持ち出され、俺は眉を吊り上げた。やけに偉そうなメディアの態度に辟易へきえきしてるせいもあったが。だから、俺は胡乱うっろんな目をメディアに向ける。

これは一体何の「子供のごっこ遊び」なのかと……………。

「ほう、それでそのソード・メイカーとやらが、一体この俺に何のようなんだ？」

「私が貴方を勝たせてやるのです」

自信満々にメディアが言い切ったので、俺は不快に感じて目を伏ふせた。

勝たせてやるだと？ ずいぶん恩着せがましい言葉だ。

たまたま試合で見かけた俺に、高価な剣でもほどこしてやるうと
いうところか？

馬鹿馬鹿しいと俺は吐き捨てる。

メディアは憤った俺におどろいたのか、目を丸くした。

「俺はほどこしなど受けん。妙なあだ名のついた気の毒な剣士の噂
を聞きつけ、パトロンにでもなって、話のネタにでもしたかったの
か？ 暇つぶしならよそでやれ」

「え？ あっ……違っ……いや、違わないのかも
？」

メディアは慌てて否定しようとしたが、次の瞬間、神妙な顔をし
てぼそりと呟く。

その姿に、やはりかと俺の中に失望が広がった。

嘘をつかずに本音がぼろりとこぼれるところが、子供らしいと言
えば子供らしい。

まあ、当初から期待などというものを、かけらももっていなかっ
たのだから、これは失望と言うよりも呆れと言うのが正解だろう。
悪意からの言葉ではなく、子供のただの浅慮だ。いちいち相手に
して目くじらたてる必要もない。

付き合いきれないと、俺はメディアに背を向けた。

「何処に行くのです？ まだ話は終わってないのですよっ」

足早に去っていくこうとする俺に、メディアは追いつがる。

これ以上何を話すというのだろうか？

きゅっと言う悲鳴と、どしゅっと思いで背後で何かが倒れる音がし、俺
が振り向けばメディアが地面へと伏していた。

ひらひらしたドレスなど着て走ろうとするから、足下が見えずに

転ぶのだ。

うつと痛みでうめき、涙を浮かべるメディアと視線が合う。

俺は助け起こそうと手を差しのばしかけてやめた。

いつもなら手を貸すところだが、これ以上つきまとわれるのは「めんどった」。

手を引っ込めると、恨みがましそうにメディアがおれを見上げる。

「待ちなさい！ ヒイロっ、私は貴方に大切な話がありますっ」

話など聞きたくない。

話を聞いてやれるほどの余裕など、試合に負けて気が立っている今の俺にはなかった。

「待てと言っているのに、この唐とうへん変木ぼくっ！ レディーが困こっているのに、見捨てていくのが男のすることなのですかっ？ ヒイロっ戻ってくるのですっ。今なら数々の非礼は寛かん大な処置だいで許してやるのですっ。ヒイロっ、ヒイロっライナアアアドオオオっ……」

とても許してくれるような絶叫ではない。むしろ呪い殺されそうだった。

俺のことを見知っている通行人からの、何事かと驚いたような視線が痛い。

俺はメディアの罵声から逃げるため、さらに歩調をはやめる。

貴族のお遊びに付き合える余裕がある奴に、話を持って行ってくれと、俺は気まずい思いをしつつも、メディアの静止を無視して帰宅を急いだのだった。

最強たるは誰なりしや？

警備師団、それは街の治安を維持する組織だ。

どの街にも必ず一つは存在し、主に犯罪者の取り締まり、けんかの仲裁、役所と協力しての捜査、催し物の警護など、仕事内容は多岐にわたる。つまるところ、何でも屋という意味合いに近い。

俺が所属する街の警備師団はの名称は、紅蓮の獅子12師団と言

う。

いささか大仰すぎる師団名だと俺は思う。なぜなら……。

「平和つすねえ……。」

湯気の立つマグカップをゆらしながら、同僚であるデイルが机の上に伸びていた。

目を細めて幸せそうに、春に陽気にまどろむその姿はまるで……

「紅蓮の獅子と言つより、黄色の猫だろう」

俺はぶるぶると怒りに震えつつ、師団の備品である剣を磨く手を止めた。

がたりと席から立ち上がり、デイルを怒鳴りつける。

「たるんでいるぞっ！ 警備師団たるもの、いついかなる時にも戦場へ赴けるよう、常日頃から気を引き締めてっ」

「そう言われても、ヒイロ団長。大陸5カ国中、我がソーディアス国は最も平和な国だと言われているんっすよ？ ここ数十年、地方の小競り合いはあっても、戦という戦もなく、剣の国と謳われた建国の当時の影もなく、武芸に関しては衰退の一途をたどるばかりじゃ

ないっすか」

むくりと顔をあげて、口をへの字に曲げるデイルに、俺はうぐつとつまつた。

俺が住まうここ……ソーディアス国は、かつては剣の国と言われるほど、優秀な剣士が切磋琢磨せつさたくまするお国柄だった。

それも建国の王であるソーディアス1世が、稀代の剣士であったことに由来する。

窓から外を見れば、ポールにへろんと絡みつく国旗が見えた。

そこには剣をかたどった威めしい文様が刻まれているのだが……

今のソーディアス国を象徴するならば、文様を羽ペンにでも変えた方が良い。

「それに、俺たちが警備する12区は都市といえど、辺境ですからね。俺がここに就職して出勤したのって、酔っぱらいのけんかと、夫婦仲違いの仲裁だけ。気を引き締めろって言われても、これじゃあねえって思ってしまうっす」

街の人から穀潰しやくつぶしと言われ、配属されているのは俺とデイルを含めてたつた10人。

デイルの言葉に俺は何とも言えない顔をした。

師団をまとめる団長として表面上はともかく、心の中では激しく同意したい。

重いため息をついて、俺が再び椅子いすに腰をおろすとくすくすと笑う声が出た。

「笑い事ではないだろう、アーヴィン」

「いや、すいません。団長……団長の顔がおかしくって」

アーヴィンは薄い色の金髪を揺らして笑い続けた。
俺はむっとして顔を朱に染める。

さとい奴だから、俺が胸中で何を想像したのか表情で察したのだらう。

それほど表情に感情が出ているのだろうか？ と俺は壁の鏡を見て自分の頬をさすった。

アーヴィンはようやく笑いがおさまったのか、息を整えて窓を開け放つ。

外では子供達が元気に走り回り、アーヴィンの姿を見つけて手を振った。

「いいじゃないですが、団長。平和に越こしたことはないですよ」

優しげに子供達を見つめて、アーヴィンは手を振り返す。

幸せそうなその姿に、それもそうかもなと俺は相づちを打った。
アーヴィンは去年の暮れに結婚し、今は身重の妻を抱えている。

騒動など起きなければ良いと思うのは、当然なことだ。

俺の考えこそ、時代錯誤じだいさくごと言われてもそれは仕方ないのかもしれない。

落ち込む俺に、アーヴィンは悪戯いたずらめいた表情を浮かべる。

「団長も早く嫁を貰ったらいじゃないですか」

「……それは嫌みか？ アーヴィンよ」

雉きも鳴かずばうたれまいとはよく言ったものだと思っ。

俺は立ち上がって、アーヴィンの首をがしりとホールドした。アーヴィンはうげっとカエルのような声を出す。

「団長は、人が良すぎるんですよ。他の男に譲ゆずってばかりで」

アーヴィンはそう言うが、譲った覚えは一切無かった。
気がついたときには、いつも余所の男のものになっていただけで、さすがに他人のものになった女に、横恋慕するつもりはない。いや、横恋慕するほど自分のものにしたと思うような女に、いまだかつて会ったことがないだけの話なのだが。デイルが言うには俺は鈍いらしい。
仕事もなく俺たちがふざけあっていると、とんとんとドアが叩かれた。

どうやら珍しく、来客がやってきたらしい。

「はいはい、ちょっと待ってくださいよ」

警備師団の剣士とは思えないような返事をあげ、デイルがいそいそとドアへと向かう。

よほど暇をもてあましていたのだろう。

嬉々として出向いたデイルは、ドアを開けて外に出る。

どうせまた、くだらないけんかの仲裁か何かなのだろう。

デイル一人に任せておけばいいと、俺は再び剣を磨く作業に戻るうとした。

しかし………。

「だ〜んちよ。ヒイロ団長」

「なんだ、デイル。何か大事か？」

外に出たデイルが、俺を呼びに戻ってきた。

ひよつとしたら、大人数での乱闘騒ぎか何かなのだろうか？ それにしては緊張感のかけらもないデイルの声に、俺はいぶかしげな顔をする。

「大事と言えば、大事かも。なんと、団長にお客さんっす」

「客？ 俺にか？」

「ええ、それはもう、とびっきりの美女っすよ」

含み笑うデイルに、俺はなんとなく嫌な予感がした。

そもそも俺の近い知り合いに、美女など存在しない。

一体誰だ？ と俺が外に出ると、平行な目線の先には誰も存在しなかった。

視線をゆつくりと下へと移動させ、確認した姿に俺はこめかみを押さえる。

「よくも昨日は無視して置き去りにしてくれましたね、この唐変木」

昨日出会った、貴族の少女がそこにいた。

ここは託児所ではないと俺は思う。

だというのに、こいつらは……と、俺は苛々としながら剣を磨く。

「へえ、お名前はメディアちゃんって言うんすね」

「子供扱いしないで欲しいのです。私の事はレディー・メディアと呼ぶがいいかと……」

「はい、メディアちゃん。紅茶ここに置いておくね」

「だからっ、子供扱いするではないと言っているのですっ」

怒りつつもアーヴィンから受け取った紅茶に、メディアは砂糖を2杯とミルクをたっぷり。

その光景にどう見ても子供だろうと思いつつも、3人は突っ込みはしなかった。

メディアはこくりと紅茶を一口含むと、眉をしかめた。

「安物なのですね。香りもなにもしないではないですか」

まずいとメディアは文句もんくをたれる。

ミルクをあれだけ入れておいて、香りもへったくれもあろうはずがないというのに。

俺が目を据すわらせて立ち上がると、アーヴィンがぎょっとしてすっ飛んできた。

俺の身体を拘束し、アーヴィンは必死で訴える。

「団長、お、落ち着いてください。相手は子供です」

「放さんか、アーヴィンっ！ 子供だからこそ、今のうちにしつけというものをだな」

「団長のはしつけのレベルを超えていますっ。前も貴族のお坊ちゃんを稽古けいこだからと笑顔で叩きのめして、謝礼金をもらい損そとねたのを忘れたんですかっ」

アーヴィンの言葉に、俺は冷や水をあびせかけられたように硬直こうちくする。

意にそわぬ仕事に従事したというのに、謝礼金はもらえずじまいと、思い出したくもない過去が脳裏にかけめぐった。

そうだったなど、俺はがくりと脱力して床に手をつく。

「ふうん………そっかあ。メディアちゃんはクラインヴェル

家のお姫様で、ソード・メイカーってのなんつすねえ。ところで、ソード・メイカーってのは一体何？ 最近貴族の子供達の間で流行はやってるごっこ遊びか何かっすか？ うん？」

「違うのですっ！ なんですか、ごっこ遊びとは。ソード・メイカーを馬鹿にしているのですかっ？」

意外と子供好きなのか、デイルはマイペースにメディアの相手をしている。

メディアは、デイルの雲を掴むような態度に不満をあらわにしていたが、やがてあきらめたように嘆息たんそくした。

「仕方ないのです。ソード・メイカーは建国にまつわる歴史の裏舞台。史書にも登場してこないのですから、下々の者達が知るよしもないのです」

「ほう、それはまた壮大そつたいな設定っすね」

俺はよくもまあ、こんな作り話に付き合えるものだと思いに感心した。

もともとゴシップやら、とんでも話が好きな奴だから、メディアの話は退屈しのぎにちょうど良かったのだろう。

続きはと、興味津々に尋ねるデイル……。

俺は馬鹿馬鹿しくなつて、奥の鍛錬場に引つ込もうとした。そんな俺に、待ちなさいとメディアは慌てたように席を立ちあがった。

「最強なるは誰なりしやっ？」

メディアの発した言葉に、俺は足をぴたりと止める。

振り向く俺に向かつて、メディアはくすりと笑った。

「最強なるは誰なりしや？ 選ばれし者に王位を与えん……」

もともと、この5大国がまだ1つの国だったときに、ときの賢王アルマキアスが5人の子供らに言ったと伝えられる言葉です。それぐらいは知っているでしょう?」

「知らないわけないだろう。この5大国に住む者なら子供から大人まで知っている話だ」

俺は口をへの字に曲げる。

今は昔、賢王アルマキアスには5人の子供がおり、その5人の子供達は武芸に秀で、各々得意とする武器があった。

槍、弓、槌、銃……そして剣。

己の最も得意とする武器で戦い、勝ったものに王位を与える。

その言葉のもと、王の子らは武器を手に王位をめぐって熾烈な抗争をくり広げた。

結局、王は勝者を見届けることもなく、王位を与える前に没してしまい、国は5つに分裂してしまったのだが……。

それがこの5大国の始まりであるというのは、誰もが教養的に知っていることである。

「それで、その昔話がなんだというんだ?」

「この5人の王の子の話……勝者は決まらずとも、最強の武器は一体何だったのかという話です」

ふふんつと笑うメディアに、俺は素っ気なく返した。

「なんでもいいんじゃないか?」

「なあっ……」

俺の言葉にメディアは絶句した。

どの武器にだって一長一短はある。最終的には使い手の力量で決

まるのだから、武器の種類で善し悪しを決めても仕方がないだろうと、俺が呆れたように言えば、メディアはダンっと机を叩いて立ち上がり激昂した。

「何を言っているのですっ。あ、あ、貴方はそれでも、剣の国であるソーディアスに属する剣士なのですかっ！なんたる体たらく」

恥を知らなさいと指を突きつけるメディア。

俺はやかましいと顔をしかめつつ、メディアの首根っこを掴みあげた。

猫の子よろしくぶらんと宙に浮いたメディアは、じたじたともがく。

「何をするのですっ。レディーに向かつて失礼なっ」

「ここは師団の詰め所であって、子供が遊びにきて良い場所ではない」

用がないならさっさと帰れと、俺はメディアを外へ放り出そうとした。

話の続きが聞きたいデイルは不満そうな顔をしたが、勤務中に子供の与太話に付き合っていていいわけではない。規律は守るべきものなのだ。

子供は子供同士で遊べと俺はドアを開けると、突然飛び込んできた来訪者にどんつとぶつかる。

息せき切って飛び込んできたのは、役所の下っ端の人間のようなった。

本当に今日は珍しく来訪者が多い。

俺は驚いて、メディアをどすんつと床の上に落としてしまった。

きゃんつとか細い悲鳴を上げて、メディアは目をつり上げて俺を睨んでいたが、それにかまっている場合ではないようだ。

役所の者は真っ青な顔で、かちかちと歯を鳴らしている。

ただらなぬ雰囲気に、俺がちらりとアーヴィンに視線を送れば、アーヴィンは水を入れたコップをへたり込んだ役所の者に差し出すが、それを受け取る余裕すらないらしい。

「どうした？ 一体何があった」

「し、しょう……て……街の、ろ、路地につ……し、っし……」

膝について俺が問いかければ、辛うじて商店街の路地とだけ聞き取れた。

俺がデイル、アーヴィンと呼べば二人はすかさず武器を手にとって部屋を飛び出していく。

メディアはおろおろと右往左往し叫んだ。

「こら、まだ話は終わってないのです。私を放って何処に行くのですかっ」

「それどころではない」

「ああ、悪いっすねメディアちゃん。お話の続きは、また今度と言うことで」

「気をつけて家に帰るんだよ」

いきなり取り残されて、メディアは立ちつくす。

メディアが我に返って叫ぶ声が背後で響いていたが、それどころではない。

呼び止める声を見殺して商店街の方へと俺たちは疾走する。

いつもと何が違う？ と言われると説明しにくい、あきらかに街の空気は豹変^{ひょうへん}し、不穏な空気が蔓延^{まんえん}し始めていた。

事件を聞きつけたのだろう。

すれ違う街の人々の表情は、不安げに曇り、ざわざわと声を潜めて話をしている。

そんな状況に、俺の中で得体えたいの知れないような、嫌な予感よかんが広がった……。

不穏と平和

役所の者が言っていた場所は、師団の詰め所から遠くない場所だった。

まばらな人影が、商店街に近づくにつれて多くなり、不穏な空気にざわめいていた。

俺たちが人混みをかき分け現場に到着すると、先に到着していた役所の者達が立ち入り禁止のロープを張り巡らせている。

俺たちはそのロープをかいくぐって、路地の奥へと足を踏み入れた。

「………つ。なんつすか？これ」

ぶうんつと黒い羽虫が飛んでいる。

地面にはシートをかぶせられた物体。

広がった黒い染みは、変色した血なのだろう。

春の陽気のせいか、すさまじい腐敗臭が周辺に立ちこめている。

もともと、平和ぼけしてこういう事件になれていない役所の人間達は、路地のすみの方で嘔吐えつしていた。

俺たちもこういう現場になれているわけではない。必死でのど元にこみ上げる吐き気をなんとか飲み込み、俺はどす黒く血で汚れたシートをめくりあげ、中身の惨状じやんじやうに思わずうめく。

「ひどい………」

「そうだな………」

「人間のすることじゃないっすよっ」

耐えかねてアーヴィンが口元を押さえて視線を外した。

デイルはあまりの惨状に、真っ青になって口をわななかせている。それも仕方がない。シートの中に転がった死体は尋常ではなかったのだ。

胴体は真っ二つに切断され、切断面から内臓がはみ出ており、両手両足、そして首と全てがすっぱりと切断されている。

目を見開いて絶命している表情に、俺は見覚えがあった。

「カルザス…マツケローニ……先日の公式試合の優勝者か」「まじっすか！」

デイルが驚いた声を上げる。

かりにも公式剣術試合の優勝者が、こんな風に惨殺されようとは信じがたい現実だ。

俺は遺体の周辺に墜ちている不自然な金属を拾い上げる。

「これは、もとは剣だったのか？」

俺は金属を拾い集め、地面に並べていく。

断面は非常になめらかで、輪切り場にされた金属を並べれば確かに剣の形となった。

一体何をどうすれば、剣がこのような状態になるというのか。

俺のように剣戟の末で折れたのならば、とてもこんな断面になったりはしない。

こんな、まるでチーズでもカットしたかのように……。

そんな時、俺の心の中を見透かしたように、疑問に対する答えが返ってくる。

「それは、剣で切り飛ばされたのです」

聞こえた声に、俺は思わずこめかみを押さえた。

デイルとアーヴィンがぎよつとして後ろを振り、慌てて声の主の前に立ちはだかる。

「ちよつ、メディアちゃん。追いかけて来たんすか？ 入って来ちゃ駄目つすよつ」

「子供が来て良いところじゃない。早く出て行くんだ」

さすがに咎めるような口調の二人に、メディアはふんつと鼻を鳴らす。

無理矢理にでも追い出そうと手を伸ばす二人の腕をかいくぐり、メディアは死体側まで近寄る。死体をじつと見下ろしているその表情は、妙に冷めていて、取り乱した様子は微塵もない。

俺はそんなメディアを怪訝に思った。

普通女の子ならば、悲鳴を上げてへたりこみ、下手をしたら気を失ってもおかしくない状況だというのに、メディアはまるでぶつ切りにされた遺体を観察でもするかのような風体だ。メディアは一通り検分が終わったのか、眉をひそめて呟く。

「……やはり、これは墮とし者」

「落とし物がなんだと？」

俺の不機嫌な問いに、メディアは視線だけ返した。

またつまらない子供のゴっこ遊びの謎かけか何かなのだろうか？

そうならば不謹慎きわまりないことだと、俺は気分が悪くなった。人が一人死んだというのに……。

俺は耐えかねて、メディアを追い出そうと腕をつかみ上げる。

「何をするのです？ この野蛮人っ」

「唐変木から野蛮人になっちゃったか。子供はこんな所にいるべきじゃない。さっさと家に帰って子供は子供同士で遊べばいい。興味本位

でこんなことに首を突っ込むな」

「興味本位で首を突っ込んで、痛い目見るのはあなたたちの方なのですっ」

「はいはい、メディアちゃん。これ以上はお口をチャックしようっす。うちの団長は意外と気が短いから。お兄さんがお家まで送ってあげるっすよ」

デイルがメディアの口を押さえ、抱き上げて俺から引き離す。

そのことに俺はほっとした。子供に手をあげるつもりはないが、あれ以上メディアが言葉を続けていたならば、胸ぐらをつかみ上げて恫喝どっかっしていたかも知れない。

我ながら大人げないなと思いつつも、俺は死体の見聞へと戻る。

「放せっ、放すのですっ！ どうして、どいつもこいつも、私の話をきちんと聞こうとしないのですかっ？ このままだと、大変なことになるのですっ」

「お兄ちゃん達は今忙しいっすからね。おとぎ話はまた暇なときにゆっくり聞いてあげるっすから、今日は大人しく帰るっすよ」

「おとぎ話じゃないのですっ！ やっぱり私の事を子供だからって馬鹿にしてええ」

デイルに連れられて、遠ざかるメディアの声……。

このままだと大変なことになる。

まるで予言めいたその言葉は、真実そうなってしまっことに、俺はこの時はまだ想像もできなかったのだった。

滅多に事件が起こったことがない12区での猟奇殺人……。

慣れない対応に四苦八苦し、気がつけば師団員達の疲労は限界まで来ていた。

アーヴィンに進言され、交代制で休みを取ることになったのだが、それには俺も含まれていたらしい。

休んでくださいと師団員一同から心配されてしまい、俺は1日だけ現場を離れることとなった。

久しぶりに自宅のベットへ戻り、俺は夢さえ見ず泥のように眠った。

小鳥のさえずる声と、窓から差し込む光に意識は無理矢理浮上させられる。

うつすら目を開け、朝かと重い身体をおきあがらせたところで俺は固まった。

「……………どうして、お前がここにいる？」

なにやら家捜しでもするかのように、俺の部屋を探るメディアがいた。

不法侵入だろうと俺が胡乱な目を向ければ、メディアはふんつと胸を張った。

「ちゃんと、許可はとったのです」

「誰にだ？」

「デイルに住所を聞いてここまでやってきたのです。きちんと玄関からはいったのです。そこで出会ったユーリイ姉様に許可をもらったのです」

「デイル、ユーリイ……………」

俺は顔を手で押さえてため息をついた。

ユーリイというのは、俺の年の離れた妹だ。

気立ても良くてしっかり者。それなのに、何故こんな得体の知れない少女を俺の部屋にずかずかあがらせるのか。

しかも、デイルよ。お前俺に休めと言ったくせに、こんな爆弾を押しつけてどうする？

後で覚えていろよと拳を握りつつ、俺は説明をもとめるために1階へと降りた。

「あら、おそようございます。お兄ちゃん」

「……………おはようございますだ」

口の端をつり上げ、俺はユーリイに挨拶を返す。

そんな俺に、ユーリイは吹き出した。

「あれは一体何のつもりだ？ ユーリイ」

「だって、お兄ちゃん。お兄ちゃんにあんな可愛い彼女ができたなんて、私知らなかったんだもの。私は貴方のお兄様のパートナーですなんて、出会い頭に説明されちゃったら、これはもう妹としては応援しなきゃって」

「せんでいいっ！ 全く何を考えているんだ」

俺とメディア、一体いくつ年が離れていると思っているのか。

けっして幼女趣味などではないからだと、俺は憮然としてダイニングにある椅子に腰掛ける。いつまでもお腹を抱えて笑い続けるユーリイに、俺は勝手に妄想してると吐き捨てた。

一度ツボに入るとなかなか抜け出せないらしい。

そんなこんなで、朝一番のくだらないやりとりをユーリイとして

いると、上の階から、とてとと軽い足音を立ててメディアが降りてくる。

「あら、メディアちゃん。調査は終わったの？」

「なんのことだ？」

俺がいぶかしげな顔をしていると、メディアはさも当然そうに言う。

「自分のパートナーの、素行調査ぐらいはしておきたいものなのです」

「ほう……そんな一方的な説明で、俺の部屋を勝手に荒らしていた正当性でも主張するつもりかお前は」

「それで、それで？　メディアちゃん。何か不審なものの一つでも見つかった？」

興味津々とばかりに目を輝かせるユーリイに、ふうっと頬に手を当てメディアはため息をついた。

「それが全然なのです。お母様は年ごろの殿方の部屋には、色々女性に見られたくないものがいっぱいあるのよ。相手の趣味を知りたいなら、ベットの下とかタンスの裏とかをチェックしなさいと仰っていたのに。無くて良かったと思う反面、期待はずれもいいところなのです」

「ええ〜つまらない。真面目すぎてつまらない。何も意外性がなくてつまらないよ、お兄ちゃん」

俺はがたりと椅子からずり落ちそうになる。

こんな年端もいかない少女に、一体何を教えているんだ？　と俺は呆れてため息をついた。

「いったい、どういう母親なのだろうか。」

「ユーリイと言えば、メディアの答えに指をくわえて、しきりにつまらないと呟つぶやいている。」

「なにを期待していたんだ……ユーリイ？」

「まあ、それはさておき朝ご飯にしましょう。メディアちゃんも食べていくわよね？」

「ここにこと皿を並べるユーリイに、メディアはもじもじしつつこ頷く。」

部屋には香ばしい朝食の香りがたちこめていた。ぐうつとなるお腹の音に、今のは自分ではないと釈明やくめいするメディア。俺はその子供らしい仕草に、しかたないなと苦笑いした。

メディアはふんつとそっぽを向きつつ、椅子いすの前に立つ。

「ヒイロ、椅子いすを引いて欲しいのです」

「……はいはい、お姫様」

「こついつところは本当に貴族らしい。俺は席を立って椅子を引いてやる。」

メディアは満足そうに頬ほほを緩め、席に座った。ユーリイ特性のパンケーキには生クリームとジャムが添そえられており、メディアは目を輝かせてフォークとナイフを手を取った。

紅茶の件でわかっていたことだが、メディアはかなりの甘党のようだ。

「……太るぞ」

ぼそりと呟いた俺に、メディアとユーリイが鬼のような形相で睨んできた。

「デリカシーがないなんて、最低よね」

「全くなのです。女性に体重の話をふるなど、万死に値するのです」

一般論を述べただけなのに、何故ここまで怒られなければならないのか。

理不尽だと思いつつ、俺はブラックコーヒーをすすりながら新聞に目を通す。

そこには、殺人鬼いまだに捕らえられずの文字が大きく載せられていた。苦いコーヒーがさらに苦みを増したような気がした。

そんな俺の心情を余所に、メディアとユーリイの楽しいな会話が続く。

「それで、メディアちゃんは今日この後どうするの？」

「この後？ この後は……」

むぐむぐとパンケーキを咀嚼し、メディアは紅茶を飲んで人心地つくと、とんでもないことを言い出した。

「今日はヒロにエスコートしてもらって、街を散策さんさくするのです」

「デート、デートなのねっ」

興奮気味に叫ぶユーリイに、俺は思わずむせてコーヒーを吹き出した。

汚いと氷のような二人の視線が突き刺さったが、それどころではない。

俺はフキンで机をふいた後、メディアに苦々しげに言った。

「俺はそんなことを了承した覚えはない」

「アーヴィンが了承したのです」

ぐつと親指をつきたてるメディアに、俺は馬鹿なと驚愕きょうごうした。

「何故だアーヴィンっ！ お前だけは俺の味方だと信じていたのにあの裏切り者め………。デル同様俺に休めと言っておきながら、これ如何いかに？ ひよつとして、俺はアーヴィンに本当は嫌われているんだらうか………。」

ユーリイはへこむ俺の背をばしりと叩く。

「いいじゃない。どうせ、家でゴロゴロしてるだけなんでしょう？ いったも休みは鍛錬たんれんだとか、剣術の試合ばっかなんだから、たまには街に出て遊んでおいでよ、お兄ちゃん。あ、メディアちゃんはその前に………。」

「なんなのですか？」

きよとんとするメディアに、ユーリイの口元はにやりと半月状に弧こを描く。

デートならばおめかししないとねと………。

ああ、またユーリイの悪い暴走が始まったのだと俺はうなだれた。

不釣り合いな武器

「完璧だわ……さすが私。グッジョブ」

渾身の出来と言わんばかりに、ふうつと息を吐いて額の汗をぬぐうユーリイ。

メディアは自分の格好をしげしげとももの珍しげに見つめていた。

「下々の者はこういう格好をするものなのです？」

「いや、違うだろ」

俺は誤った知識を植え付けられてはたまらないと、すかさず訂正を入れた。

白いブラウスと水色のスカート。背には天使の羽がつけられている。

これは今12区で行われている春祭りのポピュラーな衣装の一つだ。ユーリイが子供の時に同じ格好をしていたのを覚えている。後生大事にその時の衣装を保管していたのだろう。

「やっぱり、髪は三つ編みに……いや、そうじゃないでしょうユーリイ。考えるのよ……二つに上げて上にアップして、でもでもこれだけ綺麗な長い髪なのよ？カラーで巻いてしまいたいいいい」

右往左往しつつ、ユーリイはメディアの髪型を決めかねているようだった。

今のポニーテールで俺は十分だと思う。

このままだと、夜中まで着せ替えごっこをし続けそうな勢いに辟

易し、俺は喚くユーリイを無視してメディアを連れて外に出た。

どうにも慣れない格好に戸惑っているのか、メディアは不安げに俺を見上げる。

「へ、変じゃないのです?」

「ああ、大丈夫だろ。ほら、そこらの子供お前と同じような格好をしているじゃないか」

「……………」

俺はそこらを駆け回っている子供達を指さした。

安心させようと思って言ったのに、どうにもメディアは俺の返答が気に入らなかったのか、頬ほほをふくらませる。

「……………女の子がこついつ質問をしたら、言つべきことは他にあるのです」

「何か言ったか?」

「本当に気が利きかないと言ったのですつ。この唐とつへん変木ぼく」

べえつと舌を出して怒るメディアに、俺はやはり子供はよく解らんと思った。

俺を見知った街の者からは、好奇こじの視線が突き刺さる。

さすがに隠し子か? とからかわれたときには、思わず顔を引きつらせてしまった。

確かに年齢より上に見られることは多いが、さすがにショックだ。一体俺がいくつの時の子だと、暴れたくなる。

きつとこういう光景を想像して、今頃ユーリィやデイル、アーヴインは薄ら笑いを浮かべているに違いない。本当にあとで覚えてい
るよ……………。

メディアは衆目の視線など、全く気にしていないのか優雅ゆうがに道を歩いている。

一歩あゆむごとに、栗色の長い髪と白い天使の羽がふわふわと動いた。

見た目は地元の子供と一緒にのだが、やはり垢あかぬ抜けていて田舎臭いなかい雰囲気は一切無かった。

近所の悪ガキ共が顔を赤らめ、しきりに声をかけると仲間同士小突き合っているのが見える。

見た目だけは可愛いからな……………。

勇気を出せ坊主共っ！ 遠慮なく俺の代わりをさせてやろう。だから、メディアと遊びたいならさっさと来い。そして俺を解放してくれ。

そんな俺の心を見透かしたかのごとく、メディアはむっにらと睨む。

「ヒイロ、何をよそ見をしているのです！ しっかりエスコートして欲しいのです」

「……………」

何故女というものは、時々超常能力並みの洞察力うめいりを発揮するのだろうか。

余計なことは考えまい。俺はもうあきらめた。

首輪をつけられ、散歩している犬とはこういう気分なんだろうか。いや、違うな。奴らは楽しそうだ。

俺は犬のように幸せそうに尻尾を振る元気もない。

久しぶりの休日だというのに、俺は重々しいため息をついた。

街の中心部に来ると、道の端々に市が並んでいる。遠方の民芸品やら珍しいお菓子、装飾品など、それらは街の人々を楽しませてくれるようだ。

もちろん俺やメディアも例外ではなく、普段では見られない品々を興味深く見つめる。

そんな中、俺は一つの店に目をとめた。

「お、そこのがたいの良い兄ちゃん。どうだい？ 掘り出しもんだよ」

祭りのためにやってきた行商なのだろう。

木箱の上には上等のビロードの布が敷かれ、その上には大小様々な剣が並べられていた。

うぐつと俺は言葉に詰まる。視線が値札をいつたりきたり泳ぎ、ゼロの数を数える。

ひーふーみーよー……高い。

高いが、手が届かないわけでもない微妙な値段だった。

なんと迷う値段設定をするんだ行商人よ。

剣を新調しなければならなかったし、これは運命というものではないだろうか？ しかし、今月の家賃や食費を考えると、ユーリイが角をによつきり生やしそうでもある。

どうすれば？ と頭をかかえて葛藤する俺に、行商人は肩をすくめた。

「なんせこの剣なんて滅多に産出されないクロム鋼を織り交せてあ

るからね。ここで買っておかないと、間違いなく後悔しますぜ」
「……………な、なるほど」

ここまで言われては買うしかあるまい。
行商が指し示す銀色の剣に、俺は吸い寄せられるように手を伸ばした。

しかし……………。

「やめておくのです、ヒイロ」

ふんつと鼻を鳴らし、俺がのばしていた手をメディアはぺちつと叩いた。

はつと我に返って、俺はメディアを見下ろす。

俺は今まで、一体何を考えていたのだろう。危ないと冷や汗をぬぐう。

「ははっ、お嬢ちゃんには剣なんて興味がないかなあ。まあ、男じゃないと解らない世界つてもんが……………」

「武器を見る目に男も女も、子供も大人もないのです。物を知らない素人相手と侮ってもらっては困るのです」

メディアは憤った様子で、木箱の上の剣を手を取った。

「クロム鋼を織り交ぜてある？ 嘘なのです。本当にクロム鋼を混ぜて加工してあるならば、刀身は青灰色に輝くはず。こんな濃度の薄い銀色にはならないのです。しかも、なんなのですか？ この重心の狂いはっ。こんなも剣と呼ぶのもおこがまっ……………」

そこまでだと俺はメディアの口をふさいだ。

業者は口元をわななかせ、顔は真っ赤になっていた。

行商のプライドというものもあるだろう。俺はまだ何か文句を言いたげなメディアを抱えて、その店を後にした。

店からだいぶん離れ、中央にある噴水へたどり着くと、俺はメディアを解放する。

「ヒイロっ！ お前はどっちの味方なのです。あんな詐欺まがいの……」

「どちらの味方でもない。あいつはあいつで、商売で食っていかなければならんだ。安い物を高く売ろうとする、それは常套手段だ……」

「……暢気な話なのです」

騙される方が悪いんだと苦笑いする俺に、どこまでお人好しなんだとメディアは呆れたようだった。

歩き疲れたのか、ハンカチを敷き、噴水の縁に腰をかけたメディアに、俺は屋台で買ってきたリング飴を差し出す。先ほど朝食を食べたばかりだが、女は甘い物は別腹とよく言うしな。

……まあ、別腹と言いつつ同じ腹だから、やれ太ったのだと大騒ぎするんだろうが。

メディアは差し出されたリング飴をしげしげと見つめた後、それをひったくった。

「こんなもので懐柔しようと思っても、甘いのです」

「素直にありがとうと言え」

可愛くないなと言えば、メディアは頬を赤らめ余計なお世話だと眉をつり上げる。

リング飴をなめながら、メディアはふと俺に問いかけた。

「ヒイロは、あんな偽物ではなく、もっと良い剣が欲しいとは思わないのですか？」

「……………良い剣だと？」

探るような視線だった。

ああ、ひよっとして出会い頭の勝たせてやるとか、パトロンになつてやるとか、あの事だろうか？

まだ諦めていなかったのかと俺は胡乱な目を向ける。

「俺は、ほどこしは受けん」

「そうではなくて、ただ純粹に強い剣は欲しくないのか？ と聞いているのです。そうすれば、公式試合に勝つて賞金も手に入るし、名前も上がるのです。貴方は実と名声が欲しくないのです？」

「そうだな……………」

メディアの問いに俺はどうだろうと考え込んだ。

名声と実、剣士として生きる以上は欲しくないと言えば嘘になる。嘘にはなるのだが……………。

俺は目を伏せた後に、きっぱりとメディアに言い切った。

「いらんな」

「……………どうしてです？」

真剣な表情で答えを求めるメディアに、俺はため息をつく。

「確かに欲しくないと言えば嘘になるが。別に俺とユーリイが生きていけるほどの財なら、今のままで十分だし、悪い名声ではあるが「万年二位のヒイロ」やら「武器殺しのヒイロ」やら、そこそこは有名だしな。これ以上を望むのは分不相応というものだろう。俺は自分の大事な者を守るに足るだけの力があれば、それでいいんだ」

別に騎士の家系に生まれたわけでもなく、武勲ぶくんをたてる必要もな

い。

俺はただの平民の出で、ちょっと喧嘩っ早いだけのただの男で、剣とてきちんと誰かに習ったわけでもない。下手に良い剣など手にしても、自惚うっぼれて自滅するのは目に見えている。

「良い剣が無くとも、俺が腕をあげれば良いだけの話だからな。まあ、気長に頑張るぞ」

「……………」

反論されるかと思ったが、メディアは何も言い返しては来なかった。

あまりにも俺の返答がありきたりすぎて、しらけたのかも知れないと思っただが、そうではないようだ。何が嬉しいのか、メディアはうつすらと微笑んでいた。驚いたように俺が見ていることに気がつくくと、慌ててそっぽを向いてしまったが。

メディアは立ち上がって、ぱたぱたと裾すそを叩いてスカートのしわを伸ばし、空を見上げてぼそりと呟いた。

「皆が皆……………貴方のように思っているならば、不幸など起こらないのです」

「なんのことだ？」

その消え入るような声はとても哀しげで……………。

なんでもないと言ったが、その時の俺にはとてもそうは思えなかった。

禍の予感

マツケローニの殺害の後、事件は犯人が見つからないまま、一度は収束を迎えようとしているかのようにみえた。

しかし………。

「また、不審な惨殺死体が見つかったそうです。ヒイロ団長」

師団員の報告に、俺は沈痛なため息をついた。

あの後調べたところ、この12区で事件が起こる前に、1区、3区と別の区画で、同様の事件が立て続けに起こっていたらしい。

縦割り行政というか、区内で決着が付かなかったことに対する、師団のメンツを守る隠蔽工作とでもいうのか。情報がなかなか開示されず、現在に至ってしまったことが悔やまれてならなかった。

「それで次の被害者は何処で見つかったんだ？」

「はい、港の倉庫街で遺体が見つかったと。アーヴィンが現場の指揮を執って調査を進めております。手口から、またスライサーの事件である可能性が高いようです」

また、この12区で被害者が出てしまった。

俺は机の上に置いてあった、マツケローニの事件で押収した金属の破片を指ではじく。

どの事件でも遺体は切り刻まれ、剣は同様の不可思議な輪切りとなって、現場に散乱していた。それでスライサーという名が犯人に仮称としてつけられ、事件は総じてスライサー事件と呼ばれるようになったわけだが………。

「犯人は、一体何が目的なんだ？」

金品が強奪された様子ではない。

現場に行くわしたわけではなく、何とも言えないのだが、どうにもあの無数に刻まれた遺体からは、まるで殺人を楽しむかのような意図さえ感じられた。

縁者の線を当たつても、被害者となる者の共通点と言えば剣士であることではかなく、何も尻尾をつかめるような事はでてこない。

正直、手詰まりだった……。

「夜の警備を強化する。12区の東側はデイルを指揮に3人、西側はアーヴィンを指揮に……。」

今まで10人でも多いと思つた師団が、手薄に思えて仕方がなかった。

1区画をたつた10名の師団員で警備するというのは、平和だからこそ成り立っていたことであつて、こういう非常時になるとどうしようもない。

中央に申告した増員派遣が間に合えば良いと思うが、状況は刻一刻を争い、それほど悠長に構えていられるはずもなかった。

「ヒイ口団長？」

「いや、なんでもない。そうだな、南には俺が行く」

物思いにふけりかけ、俺は首を横に振つた。

無い物ねだりを今しても仕方がない。現状でできうる最善をつくすしかないのだ。

師団員が指示に従つて部屋を出て行き、一人になつた俺は備品である剣を引き抜く。

鈍い鋼色の刃は、所々かけた部分があつた。この剣もそう長くないだろう。

『最強たるは誰なりしや？』

ふいにメディアの言葉が脳裏のうりに思い返された。あれ以来、メディアは師団の詰め所つめには姿は見せていない。たぶん飽きたのだから。子供とは気が多く、移り変わりの早いものだ。

「最強たるは、誰なりや……か」

強くなりたいとは願った。

俺は貧ますしく学もなく、剣士になって食っていく以外に道がなかったから。

残念ながら才能に恵まれなかったようだが。それはこの欠けて今にも折れそうな刃がありありと語っている。

俺は苦笑いをして、剣を鞘こぼに戻した。

「迷ったところでしょうがない。スライサーがどんな化け物かは知らんが、俺は職務を全うして戦うしかない」

窓を見れば空は薄暗く曇り、ざあざあと雨が降り出した。

殺害ころが起こるのは必ず夜。

俺は外套がいとうを羽織り、詰め所を後にした………。

「12師団、紅蓮の獅子。全員そろっているか」

明かりを手に、アーヴィンが点呼を始める。

師団員からは緊張したような返事が返ってきた。不安げなその表情に、俺はしつかりしろと檄げきを飛ばすが、内心では仕方ないと思う。街の治安を預かる師団と言っても、このような事件に出くわすことなど今までなかった。

あまつさえ、敵は正体不明の殺人鬼ときたもんだ。不安に思うなというのも無理がある。

「そうっすよ。いざとなったらヒイロ団長を盾にして一目散に逃げるっす」

「…………お前の俺への気持ちはよくわかったデイル」

茶化すデイルの頭を、俺は背後から殴った。

うげつと悲鳴を上げてデイルが頭を抱えてうずくまり、師団員からは失笑が漏れて、若干空気が和らいだ。

こういう気遣いができるのがデイルの良さだろう。俺はむすつとしつつも、すまないなとぼそりとデイルに向かって咳せきいた。デイルはへへつと笑って、自分の担当である東側へと師団員を引き連れて走っていった。

その背を見送り、俺はアーヴィンに向き直る。

「では、予定通りアーヴィンは西側へ俺は……………」
「団長？ どうしました？」

ふいに言葉を途切れさせ、表情を険しくした俺にアーヴィンは驚く。

俺は無言でアーヴィンの横をすたすたと通り過ぎ、電柱の影へと手を伸ばした。

「…………何をしている？」

「な、何をしていようと、そんなの私の自由なのです」

がしりと首根っこをひつつかみ、俺は電柱の影に隠れていたメディアを引つ張り出した。

変装のつもりなのか、丸メガネをかけ、帽子をかぶったメディアがうわずった声を上げる。

その光景に、アーヴィンはあちゃあつと顔を手で押さえた。

「子供がこんな夜ふけに何をしているっ！ さっさとベットに入つて寝ろっ」

「そんなことを貴方に命令されるいわれは無いのです。私には、私の仕事があるのだから、邪魔しないで欲しいのですっ」

強情に言い張って、メディアは俺に向かってしっしと手を振った。俺の中で何かがぶちんと切れる音が聞こえる。

「ほおう、仕事だと？ 電柱の影に隠れて、俺たちの動向をこそこそ探ることがか？」

「こそこそとは何ですかっ、まるで盗人のごとく言うなんて失礼な私にはやらなければならぬことがあるのです」

「だから、子供のごっこ遊びは陽がたかいうちに、子供同士でやれと言つて……」

「ま、また、私の事を子供扱いして馬鹿にしてっ！ きいいつ、クラインヴェル家のレディー・メリアに向かって、こんな失礼な奴は初めてなのですっ。なんたる屈辱っ」

放せとメディアはこともあろうに、俺の足のスネを蹴った。

思いの外強い衝撃に、俺は痛みで口の端をつり上げる。

「きーさーまーあああっ……」

「だ、団長落ち着いてください。こんなことしてる場合では無いで

しよつっ!」

いい加減にしてくださいと叫ぶアーヴィンに、俺はなんとかその場は怒りを収めた。

アーヴィンの言うことは正しい。次の被害者を出さないためにも、早く警備に付かなければならないのだ。

俺は自分の目線まで、つかんだメディアを持ち上げる。

「お前、家はどこにある?」

「西側の宿場街の風見鶏亭という所に借宿をもっているのです」

「そうか……アーヴィン」

俺は降ろせともかくメディアを肩に担ぎ上げ、アーヴィンにすまないと頭を下げた。

察したアーヴィンにはっこり微笑む。

「悪いがお前は南へ部隊を率いて行ってくれ。俺はこいつを宿に送り届けて、そのまま西区の警備につく」

親の顔を見て一発文句を言ってやらんと気がすまんと憤る俺に、アーヴィンはわかっていきますと苦笑いした。急な変更にも気を悪くした様子もなく、アーヴィンは素早く南側の警備の配置を部隊へ指事していた。

その姿に、俺は本当ならばアーヴィンこそが、団長を務めた方がいいのだろうなと感じた。

俺と違って冷静で、人当たりも良く、頭も良い。

剣の腕が俺の方が上だからと言う理由で、アーヴィンは団長の座を辞退したのだが、本当は俺の経済状況を思っでの行動なのは、口に出さずとも解っていることだった。

本当に、アーヴィンには頭が下がる思いだ。

「気をつけるよ、アーヴィン」

「はい、団長も無理をなさらず」

アーヴィンは強気に笑って、部隊を率い南側へと出発していった。その姿が見えなくなるまで見送り、俺はさてと肩に担かつがれふてくされるメディアを睨んだ。

「送ってやるのはこれ一度きりだからな。金輪際俺の手をわずらわせるなよ」

「誰も送って欲しいなど言っていないのです。何を勝手に宿に帰るなど話を決めているのですか！ ようやく余計な外野がいなくなっただからです、私たちもスライサーを探しに行くのですっ」

「だから……正義の味方ごっこをやりたいなら、子供同士で遊べ」

厄介な子供にからまれたものだ俺はため息をつく。

殺人鬼相手にしなければならぬというこの非常時に、冗談ではなかった。

まったく、このメディアのお気楽具合はなんなのだろうか俺は思う。本当に貴族という輩は頭のネジがゆるんでいるとしか思えない。

「貴方だけではスライサーは倒せないのです」

「お前がいれば倒せられるとでも言いたいのか？」

「もちろんなのです」

「貴族というのは、本当に頭がおかしいとしか思えない……」

子供というのは根拠のない自信をもちがちなのは、俺も幼い時に

経験済みだ。

無謀なけんかをふっかけて痛い目を見たことは数知れない。しかし、さすがに殺人鬼相手に正義の味方ごっこするほど阿呆だったわけではなかった。

それは別に俺が良識を一応持っていたとかという話ではなく、世間一般の子供は普通そうだろうと思う。

一部の馬鹿貴族をのぞいての話だが……。

メディアは俺の棘とげのある言葉に、口の端はしをつり上げた。

「頭がおかしいのは貴方の方なのです。あんな使い方していたら、剣が壊れてばかりなのも納得なのです」

やれやれと肩をすくめるメディアに、俺は顔をしかめる。

やけに自信たっぷりに講釈をたれるメディアに、俺は性格が悪い奴だと思った。何も知らない子供のくせに、解ったような口をきかれて良い気はしない。

「俺の腕が悪いことなど、いちいち子供に指摘されずとも解っている」

「……そういう結論に達するから、貴方は頭がおかしいのです。自分の事なのに、何も解っていないとは」

「一体、お前は何が言いたいんだ？」

「解らない者に、言ったところで無駄なのです。今まではそのらへボ剣士やごろつきが相手だったから、それでもなんとかあったのでしょうけど、スライサーを相手に、今の戦い方を押し通すつもりなら、貴方は間違いなく死ぬのです」

「……………」

縁起えんぎの悪いことを言う奴だと俺は目を伏せた。

俺は宿場街の棧橋へとさしかかる。

メディアが言った風見鶏亭はここからそう遠くない場所にある、宿場街で一番大きく上等な宿だ。

メシが旨いので、宿泊せずとも食事だけという者も少なくない。料金はかなり割高なので、貧しい俺にとっては全く縁がない場所の一つなのだが。

そこを借宿として長期滞在しているといるならば、メディアの実家はよほど裕福なのだろう。

うらやましい限りだ……。

洒落た石造りの門柱をこえ、風見鶏亭にたどり着いた俺は、宿の従業員に案内されてメディアの借りている部屋へと向かう。

「本当にいらぬ時間をとらされた。俺も早く警備に向かわなければならぬが、一言お前の親に注意をだな……。」

「無駄なのです。だって……。」

メディアの借りている部屋の前に立ち、俺がドアをノックすると部屋の中から男の声がきこえた。しばらくして、がちやりとドアが開かれる。

出てきたのは、黒い礼服を着込み、ネクタイを締めた中年の男だった。無表情で灰色の瞳の片方にはモノクルをつけている。高い驚鼻^{ばな}でインテリ臭い雰囲気^わが漂うこの男が、メディアの父親なのだろうか？ と考えかけたが、俺の予測は男の次の行動で覆された。

「お帰りなさいまし、メディアお嬢様」

「出迎えご苦労なのです、セイレン」

深々と一礼するその様に、俺はこの男がメディアに仕える執事な

のだと悟る。

メディアは俺の肩から飛び降り、執事であるセイレンを背にする
と俺を見上げた。

「ここに滞在しているのは私と執事だけなのです」

「……なるほど」

親に説教しようとしても無駄だとメディアは勝ち誇ったように笑
う。

ならば、それはそれでかまわないと俺は思った。執事ならば自分
の主の無謀を諫めるのもまた仕事だ。さあ話を聞けと、また両手を
振り上げ騒ぎ出したメディアの頭を、俺はがしりと押さえ、淡々と
セイレンに向かって進言した。

「子供は夜中に出歩かせず、ベットで寝かしつける」

「御意……」

「セ、セイレンっ！ 何をへりくだっているのですっ。主人たるこ
の私に無礼を働く男なのですよっ。言い返してやらずにどうするの
ですっ」

「そうは言われましてもメディアお嬢様。この方はお嬢様のパート
ナー……プロミス・ユーザーになれる方ではないのです
か？ それならば執事の私が敬意を払わなければならぬのも、当
然のことかと……」

「プロミス・ユーザー？」

「ああ、なんでもないのですっ。それは私が後できちんと説明する
のです。セイレン、主である私を差し置いて勝手に説明しないで欲
しいのですっ！ こういうことはもっと厳かに、場の雰囲気を選ん
で私は話をしたいというのにつ」

「しかし、お言葉ながらお嬢様……」

「黙るのです、セイレンっ、私の言うことが聞けないのですかっ」

「……………うるさい」

俺は顔をしかめて耳を押さえた。ここで不毛な言い争いをしてい
る暇ではない。

俺はもういいと、言い争うメディアとセイレンに背を向けた。
すたすたと階段を下りる俺に、慌ててメディアは追いつがる。

「待つのですっ、貴方だけではスライサーは倒せないと言ったので
す」

「いい加減にするんだ、メディア」

俺が声を荒げると、メディアはびっくりと身体をすくませた。

狼狽えたように言葉につまるメディアに、俺はきっぱりと言いつ
つた。

「倒せる倒せないが問題じゃないんだ。俺はこの12区の師団の団
長で、この区に住む者立ちの治安を守らなければならない。それに
はお前も含まれている」

子供の遊びではないし、子供が首を突っ込んで良い問題ではない。
もう大人しくしていてくれと言っ俺に、メディアは唇をかんで下
をうつむいた。

「貴方もお父様やお母様と同じことを言うのです。無理だっ
て言うのですっ」

「……………なんのことだ？」

「私以外じゃ駄目なのです。私以外だったらミレー又は……………」

メディアの続きの言葉は響く悲鳴と、ばたばたと慌ただしい足音

にかき消された。

従業員が血相を変えて、俺を呼びに飛んでくる。

俺が人垣をかき分けて門へとたどり着けば、そこには師団員が倒れ込んでいた。アーヴィンと共に西側に向かった師団員だった。

肩から腕がすっぱりと切り取られ、身体には無数の切り傷が刻まれている。肩から切り落とされているので、傷口を縛って止血しようにも簡単にはいかない。

俺は従業員から貰ったタオルで必死で傷口を押さえた。

「おい、しつかりしろっ！ 一体何があつた？」

俺が呼びかけると、辛うじて口を動かす。

耳を近づけ、俺はなんとかして声を聞き取るうとした。この傷で、よくここまで知らせに来たと俺は慟哭する。

たるんでいると、文句ばかりを言っていた俺自身が、恥ずかしくて仕方がない。自分が団長を務める師団員達は、こんなにも必死で自分の職務を全うしようとする奴らではないか……。

「に、西が……わの、工場跡地で、す、スライサーと遭遇。アー・
・・ヴィンさんが、俺たちを、逃がそうとして、ひ、一人で……
・・」

残った方の手をふるわせながら、俺の腕を掴む。

そして、ぱたりと力を失った手は地面へと落ちた。それ以上言葉が紡がれることもない。

俺は見開かれたままの目を閉じさせ、ゆっくりと師団員の身体を地面に降ろす。

遅れてやってきた役所の人間に後をたくし、俺は風見鶏亭を飛び

出した。

「私も行くのです！ 連れて行くのですっ」

服の裾をつかんだメディアの手を振り払う。

先ほどの深刻な表情に、何か事情はあるのかもしれないと思っ
たが、殺人鬼の前に連れて行けるはずもない。哀しげにゆがんだメ
ディアの顔を視界の端に捕らえたが、俺はすつと顔をそらして前を
見る。

地面を蹴って前へ前へと俺は疾走した。

街の地理は知り尽くしている。最短距離を俺はだたひたすら突っ
走る。

周りの風景が残像のように流れていった。

血に飢えし者

閉鎖へいさされているため、工場跡地には鉄線が張り巡らされている。俺はぐつと地面を踏みしめ、一息でその柵さくを跳び越えた。ずしやつと地面に着地し、剣戟けんげきが響く方へと向かう。どんどん嫌な感じが酷なる。

これは殺気かと俺は身震いした。こんな激烈な感覚はいまだかつて感じたことはない。

工場内に入ると、倒れているアーヴィンが目に入る。

「アーヴィンっ！ 無事かあっ」

俺の叫びに、アーヴィンが顔を上げた。
生きているということに、俺は心底安堵あんどした。
瞳を見開き、アーヴィンは俺に向かって必死に叫び返す。

「駄目です団長っ！ 来てはいけないっ」

アーヴィンの静止に、俺は一瞬足を止める。

それが幸いした。俺が空気の動きを感じて横に飛んだ後、俺のいた場所の地面が縦に切られて裂けたのだ。何が起こったのか？ その答えはすぐにわかった。

「……………お前がスライサーか」

俺はぐくりと喉のどを鳴らして目の前の男、スライサーに剣を構える。白いの長い髪かみの隙間すきまからのぞく、不気味な赤い目は楽しげに細められ、口は半月状につり上げられて、犬歯がのぞいていた。

その手には、歪いびつな巨大な剣が握られている。
俺はこんな禍々まがまがしい剣を始めて見た。

一体何の材質でできているのか、真っ黒な闇のような刀身には紅い模様が刻まれている。

まるで血のようなその赤は、剣の異質さに拍車をかけていた。

実力のほどは未知数……。

あのマツケローニを一方的に惨殺ざんさつした事から、腕は相当なものなのだろうと俺は推察した。

油断できない相手に、俺は神経を尖とがらせる。

『最強たるは……誰なりしや……』
「なんだとっ？」

俺は思わず問い返した。

スライサーは目を見開いて奇声を上げる。

『最強たるはっ、この俺だあああああっ』

闇の刃をひるがえし、スライサーは俺に向かって突進。フェイントを交えた動きは攻撃を幻惑げんわくさせる。

惑わされるかと、俺は剣を構え眼を細めた。アーヴィンが傷口を押さえつつ、叫んだ。

『いけませんっ、団長っ！ その刃はっ』
『もう、遅いっ……』

スライサーの刃が俺めがけて振り下ろされる。

俺はその刃を剣で受け止めようとしたが、ふと背中に悪寒が走った。

なんと説明して良いかは解らない。まるで予感めいたその何かは、俺の身体を横へ回避へと突き動かしていた。

「なっ……」

スライサーの刃が俺の剣をかすめる。

俺は目を見開いた。待ち構えていた衝撃は何もない。ただ、まるで紙でも切るかのように、スライサーの刃は俺の剣を切断していく。俺の脳裏に、今までの被害者の現場に落ちていた金属片を思い出させた。

あれはスライサーの刃を剣で受けようとし、被害者はそのまま剣ごと切断されたのだ。

「くっ……」

俺は辛うじてスライサーの刃を避けきって、体勢を立て直すために後ろへ飛んだ。

からんつと俺の剣の刀身半分が、地面に重い音を立てて落ちる。

俺は予備の短剣を腰から引き抜き、スライサーに構えるが、正直状況はかなり悪い。

スライサーの剣を、自分の剣で受け回避する手段は仕えないのだから、相手の剣を体術だけで完全回避した上で、スライサーを仕留めなければならぬのだ。

相手の力量は、先ほどの剣筋からマツケローニよりは確実に上。動きはなんとか読めるが、剣を使って防御できないというリスクが大きく俺にのしかかる。

『俺の剣の威力を知らずに飛び込んで、回避できたのはお前が初めてだ……。上物だ、上物だあ……。ひっ、ひっ』

スライサーは狂ったように笑い声を上げた。

ひとしきり笑った後に、先ほどの狂った姿が嘘のように、真剣に表情を引き締める。

仄暗い光をたたえた目で俺を見据え、先ほどの型も何もない適当な一撃とは打って変わって、剣を水平に構えた。切っ先は微塵もぶれない。

押しつぶすような殺気がさらにふくらんだ。

思わず俺の足は一步後退する。

今まで、これほど戦いが怖いなどと思ったことはなかった。

しかし、ここで引き下がることは俺の矜持が許さない。

俺はそれ以上後退しない。足を肩幅に開いて、低く短剣を構えた。ちりちりと空気がやけるようだ。時間の経過が無限のごとく感じる。

いつもの静寂はなく、バクバクと自分の体内から響く心音がやけに大きく聞こえた。

つうつと頬に汗が流れる。嫌な想像ばかりが頭に浮かぶ。

『そちらから来ないなら、私からいくぞ……』

スライサーが先手を取る。

地面を踏み切り、下段からの切り上げ。これを俺はバックステップで回避し、続く行動でスライサーの顔面めがけて蹴りを放った。

本来、剣同士の戦いに体術での攻撃を織り交ぜるなど、無粋も良いところだと思っただが、俺の獲物は不得手の短剣であり、相手の大剣とは圧倒的にリーチの差がありすぎる。

「大人しく、投降しろスライサー」

『興ざめするようなことを言ってくれなつ』

大剣でありながら、スライサーはまるで羽でもにぎっているかのよう、縦横無尽に刃を繰り出してきた。俺はそれを紙一重でかわしながら、チャンスをつかがう。

本来なら生かしたままの捕縛が好ましいが、そんなことを言われる相手ではない。

確実に行動不能に陥られるような手傷を負わせなければ、次の瞬間自分こそが真つ二つに切り裂かれているだろう。

俺は攻撃をかくぐり、スライサーのど元めがけて短剣を突き出す。

それを読んでいたスライサーは剣の腹の部分で俺の短剣を受け止めた。俺の短剣が砕ける音と、奇妙な甲高い声が響く。

「……女の悲鳴？」

気のせいかも知れないが、悲鳴は剣から響いたように聞こえた。

聞けば胸が締め付けられるような悲痛な声に、俺は動揺する。

「団長つ、避けてくださいっ！」

アーヴィンの声に俺は我に返る。

咄嗟に身体をひねったが、完全に回避はできなかった。

肩の辺りに嫌な感触が走り、激痛と血しぶきが上がった。

飛び散った血が目に入り、俺は慌てて目をこすったが前がかすんでよく見えない。

『なんだ、呆気ない。所詮はこの程度か……お前もさつさと、我が剣の贅となるがいい』

「そうはさせないっ、団長逃げてくださいっ」

どんつと俺をアーヴィンが突き飛ばした。

驚いて俺は目を見開く。アーヴィンの困ったような笑顔が霞んだ視界に見えた気がした。

次の瞬間、どぼんつと俺の身体は工場内にあった水路に落下する。

げぼげほと咄嗟に飲み込んでしまった水をはき出し、俺は水面から顔を出した。

「アーヴィンっ……アーヴィンっ！」

俺は壁に備え付けてあるはしごに手を伸ばし、なんとか陸に上がろうとしたが、それは叶わなかった。雨で増水していた水路の流れは思いのほか速く、俺の手はもう一步のところではしごをつかみ損ねた。

濁流たくじゅうに乗って、俺の身体は無理矢理工場の外へと流されていく。

出血で遠のく意識の向こうで、俺はアーヴィンの断末魔を聞き、その後目の前は真っ黒にフェードアウトしていった……。

後日、市街の水路で運良く救出された俺は、病院のベットの上で目をさまし、泣きはらした目のデイルから、アーヴィンが遺体いたいで回収されたことを聞かされたのだった。

俺は無精ぶしちゆうひげが生えただらしなない様相で、無気力にベットから青い空を見上げていた。

今頃アーヴィンの葬儀が行われているのだらうと思うと、俺はいたたまれない気分になった。

俺は鬱憤うつぶんをはき出すように、壁を拳でなぐる。肩に激痛が走り、俺はうめいた。

「一体、何をやっているんだ。俺は……………」

スライサーを取り逃がし、アーヴィンをはじめ、南側の警備にいた師団員は全員が命を失うという結果になった。

本当ならば、俺が南側の警備に付くはずだったのだ。そうすれば、被害は俺だけで済み、アーヴィンや他の師団員達の命は助かったというのに。

「アーヴィン、お前がいなくなつてどうする？ お前には守るべき者も、これから生まれる新たを守るべき者もあるだらう。それなのに……………」

俺は枕まくらに顔を押しつけて嗚咽おんげんをもらす。

本来俺がやるべきだった役割を、デイルは果たしてくれた。

俺が怪我で数日意識を失っていたので、その間に残された妻へとデイルがアーヴィンの殉職じゆんしやくを伝えてくれたのだ。

デイルは、大丈夫だと気弱に笑っていたが、身重である女性に愛する夫の死を告げることが、どれほど酷だったのかは想像に安い。

こんこんつと病室のドアがノックされる。

俺の返事も待たずに、ドアががちゃりと開かれ、メディアが入ってきた。

市街の水路で浮いていた俺を発見し、病院に運んだのはメディアとその執事であるセイレンだったらしい。

とても相手をしているほど心に余裕はなかったが、助けて貰った借りからか、俺はメディアを邪険には扱えなかった。

「傷の具合はどうなのです？ まあ、肩の傷より別の傷の方が重傷のようですが」

メディアは備え付けの椅子いすの上にすわり、胡乱ごんごんな目で俺を見ている。

俺は枕へと背を戻し、再び窓の外へと目を戻した。

沈黙が続く、メディアが気まずそうに口を尖とがらせる。

「なんとか言ったらどうなのです。いつもは私が何かを言ったら、すぐ失礼な言葉を返すくせに……調子が狂うのです」

しりすばみにメディアの声が小さくなった。

無理に気をつかっていることが解った俺は、普段にない態度のメディアにくすりと笑う。

それに気がつき、メディアは口をぱくぱくさせて赤面した。

「なっ、何を笑っているのですっ。そもそも、貴方が私の忠告を無視し、一人突っ走った結果がこの有様なのですっ。心配して追いかけて来てみれば、水路にぶかぶかと浮いているわ、大怪我して病院に担ぎ込んだの大騒動。アーヴィンは……」

メディアは不意に言葉を切りうつむいた。

「アーヴィンのことは………相手が悪かったのです」「相手が悪かったと?」

俺のせいではないとメディアは言いたかったのだろうが、変に慰

められた方が余計に傷つくというものだ。普段なら子供が浅慮せんりょで言っていることだと流せても、今の俺にそれだけの余裕は無い。
はっとなんは吐き捨てた。

「アーヴィンが死んだのは俺のせいだ。俺が南側の警備に行つてなければ死ななかつた。俺が呆けて隙を作つたから、俺が弱いから、俺がもつと強ければアーヴィンは死なずに済んだんだ。いつもそうだ、にこにこ笑つて控えめで……人が良すぎる？ それは俺のような馬鹿者のことではなく、自分をためらいもなく犠牲にできるアーヴィンのような奴の事を言つんだっ」

息をつくまもなく喋り、俺ははあはあと息を荒げた。

ずきずきと肩の傷が痛むが、それ以上に胸の中の鉛のように重いしこりの方が存在が大きい。

メディアはそんな俺をじっと見つめた。

「気は済んだのですか？」

「………なんだと？」

「自分をおとしめて、可愛そつな自分を慰める自己満足は気が済んだのですか？」

俺はかつと目を見開いた。

ぎりつと噛んだ唇からは血の味がした。

見つめてくるメディアのエメラルドの瞳を俺は見返した。

その透き通るような碧緑の色に、わき上がった激情が沈静されていく。

メディアの言っていることは間違つていないと俺は頂垂れた。こんな病室のベットの上で、俺は何をうだうだと考えている？ 今さら悔やんでも、殺されたアーヴィンは戻つてこないのだ。なんと情けないことか………。

メディアはうつむく俺に、ため息をつく。

「大事な人を失ったのは貴方だけではないのです。スライサー・・・奴から私は、なんとしてもミレーヌの・・・ミレーヌの剣を取り戻さなければならぬのです」

スカートすその裾をぎゅっと握り、メディアは決意に満ちた表情で咳いた。

一体何のことだ？ と俺は訳がわからなかった。

困惑する俺に、メディアはようやく話を聞く気になったようだと思いを吐く。

メディアは足をぶらぶらさせつつ、思い出すように語り始めた。

「ミレーヌは、我がクライヴエル家の遠縁の子なのです。曾祖父の妾の子・・・まあ、表沙汰にできなかった子の血縁者という奴なのです。不慮の事故で両親が亡くなり、天涯孤独になったので、我が家がミレーヌを引き取った。そういうことなのです」

よくある話だというメディアに、俺は苦い気持ちでいっぱいになった。

簡素に語るメディアの言葉の裏では、色々あったのだろう・・・

なにかと貴族というものは、継嗣問題けいしやら血縁けいせんについての問題がつきまとう。正直、この年頃の少女が、そういう大人の間のもつれを知ることが俺は好ましく思えない。

しかし、知らずにいられるほど貴族の社会は甘くもないのが事実だった。

「まあ、大人達の争いさかいはともかく、私はミレーヌのことを姉のよう

に思っていたのです。ミレー又は年頃とあつて、クラインヴェル家
に出入りしていた一人の騎士に恋をしたのです。その騎士は名実を
求め切磋琢磨していたので、ミレー又はなんとかしてその騎士の力
になりたかつたのでしよう……」

それが悲劇を生んだのだとメディアの表情がゆがむ。

ミレー又はクラインヴェル家が秘匿ひたくしてあつた剣を盗み出し、そ
れをこともあるうにその騎士に与えてしまったのだ。

本来クラインヴェル家の直系である者しか、受け継がれるはずも
ない剣を、傍流であるミレー又は盗み出したことに一族は激怒し、
ミレー又はその騎士ともども家から追い出された。

「はじめのうちこそよかつたのです。しかし、その騎士は徐々にそ
の剣のもつ威力に魅せられ、ゆがんでいったのです。取り返しがつ
かなくなつた頃、ようやくミレー又は己の過ちに気がつき、騎士か
ら剣を取り返したのですが……」

「殺されたんだな……」

メディアの最後まで発せられずに濁にごした言葉を、俺は継いで低く
うなつた。

そのミレー又はを殺害して剣を奪つた騎士、それこそがスライサー
なのだろう。

俺はスライサーが持っていた禍々まがまがしい剣を思いだし、拳が震えた。

「あの剣は、持つ者を選ばなければならぬのです。資格がない者
が持てば、剣に飲まれて自滅する。そういう剣なのです。一族の者
は、あの剣を破壊するつもりなのですが……私は、あの剣
をなんとしても壊さず回収したいのです」

だから執事を連れて、ここまで一人で追ってきたのだと、メデイ

アは決意に満ちた表情で俺に打ち明ける。

経緯はわかった。姉と思っていた存在を殺害された無念も、アーヴィンを失った俺にはよく解る。

しかし……………。

「メディア、お前は大人しく実家に帰れ……………」

「ど、どうしてなのですか？」

食い下がるメディアから、俺は視線をそらした。

スライサーに相対したからこそ解る。あの剣は尋常ではなく、スライサー自身も相当の使い手だ。

剣を取り返したいと望んでも、スライサーを倒さない限りはそれも叶わないし、子供が首を突っ込んで解決できるレベルの話ではないのだ。

「大丈夫なのです。ヒイロ、貴方と私が一緒なら……………」

「俺は、スライサーに負けたんだ。俺じゃ、どうにもならない」

悔しいがそれは厳然たる事実だ。

肩の負傷を考えても、これからとれる最善の策は、中央からの増援部隊を待ち、共同戦線をはってのスライサー討伐しかない。

それでも多くの犠牲を覚悟しなければならぬだろう。

「……………逃げるのですか」

メディアは椅子から立ち上がり、怒りと宿した目で俺を見下げ果てたのよう見た。

そう取られても仕方ないと思う。

メディアを巻き込みたくない等というのは、言い訳にしか聞かえないだろう。

「アーヴィンの仇を取りたくはないのですかっ？」
「ああ、今さら死んだ者のことをどうこう言ったところで、どうしようもないからな。俺はアーヴィンの敵を討つことより、自身の命の方が惜しいんだ」

俺は皮肉げな笑みを作った。

心ない嘘の言葉は刃となって、俺自身へと突き刺さる。

無言で俺とメディアは見つめ合う。先に視線をそらしたのはメディアだ。

メディアはうつむいて一言、そうですか………と失望の言葉をもらし、病室から出て行く。

ドアが閉まった事を確認し、俺はこれで良いと顔を手で覆って目を閉じた。

これで良い………。犠牲となるのは、俺一人で十分だ。

差し違えても、必ずアーヴィンの仇はとる。

俺は静かに、怨嗟えんさをはき出したのだった。

濡れ衣

退院まではまだ時間を要したが、俺は止める医者振り切つて仕事へと復帰していた。

驚異的だと言われたが、肩の傷は一応はふさがっている。

「ヒイ口団長、大丈夫なんっすか？」

不安そうなデイルを、俺はギロリと睨む。

悠長にいつまでも療養している場合では無かった。

一日でも早くスライサーを探し出して、アーヴィンの仇を取らなければならぬのだから。

焦っている自覚はある。

正直、メディアがあのまま大人しく実家へ帰つたと思えない。

メディアがスライサーに遭遇し、無謀なことをしでかす前に、俺がけりをつけなければならなかった。

「増援部隊の到着は、いつになる？」

「ええと、先日連絡がきたっすから、もうそろそろ……」

噂をすれば何とやらだった。

師団の詰め所の前が騒がしい。

馬のいななきと、蹄の音、ざわざわとざわめく声に、俺は慌てて外へと飛び出す。

姿勢を正し、敬礼する俺を馬上から見下ろす男が一人。

「お前が12区の警備師団の団長か？」

「はっ、紅蓮の獅子12師団団長、ヒイロ＝ライナードであります」

男は俺の言葉に、興味もなさそうにふんつと鼻を鳴らし馬から下りた。

側に控えていた従者が、慌てて手を出すと、そこに腰に差していた剣をぞんざいに投げ捨てる。

俺はその行為に眉を潜めた。

仮にも剣士である者が、己の剣をこつちも粗雑そざつに扱うとは。

俺の嫌な予感が続く男の言葉で確信へと変わった。

「我が名は、ファウロ侯爵家が末子、ダグラス＝エルデ＝ファウロである。此度の事を慮おもんばったソーディアス国王より派遣され、ここに来た。連続殺人鬼、スライサー捕縛に全力を尽くし……」

長々とした口上は、途中から俺の耳をすり抜けていった。

過剰な期待は禁物とは思っていたが、いくらなんでもこれは酷いだろうと思う。

確かに12区はソーディアス国でも、さしたる重要拠点でもない辺境だが、こんな馬鹿貴族を送りつけてきてどうするつもりだと俺は内心憤った。

ひよろひよと薄い筋肉に、どう見ても剣などろくに握ったことのないような手。装飾過多でまるで実践的ではない剣。

この男があのスライサーを相手に、どのような指揮が執とれるというのか。

「おい、聞いているのか？ ライナード」

「はっ……」

気がつけば、長い口上は終わっていたようだった。

ダグラスは俺を値踏みするかのようじろじろ見た後、ふんと鼻

を鳴らして言い放つ。

「スライサーの捜査、捕縛は先行部隊である我々が一任する。したがって、貴様らはすみやかに我らに街の見取りを説明し、通常勤務に戻れ」

「なんだとっ……」

「ヒ、ヒイロ団長っ。落ち着いてくださいっすっ」

俺は思わずダグラスにつかみかかりそうになったが、それはデイルによって阻まれた。

貴族に逆らってはいけないと、デイルがぼそりと耳打つ。

ダグラスのにやけ面に、俺はそういうことかと歯ぎしりしたい気分になった。

こいつは、スライサーから街の人々を守りたいなどと言う気持ちはかけらもない。

あるのは自信の名誉欲のみなのだ。

先行部隊などとよく言ったものだ。要は未っ子のため家督にはか
らめず、家で立場が無いからごり押しして、手柄をたててやろうと
出向いてきたのが見え見えだった。

付き合うだけ馬鹿馬鹿しいと、怒りを収めて俺はデイルの肩を大
丈夫だと叩いた。

まあ、いい……。こいつらがスライサーを倒せるとはと
ても思えないが、やりたいというならば勝手にやればいいのだ。

こんな奴らがどうなるかと、俺の知ったことではなかった。

「解りました。我らは通常勤務へと戻り、スライサーの件はダグラス様にお任せいたします。デイル、ダグラス様の部隊の者に、この街の見取り図を渡してやれ」

「了解っす。ヒイロ団長っ」

嫌な顔一つ見せず、デイルは気難しいダグラスの相手を上手くやっている。

本来こういう輩をうまくかわすのは、アーヴィンが今まで引き受けていた。

デイルはアーヴィンが亡き後、仕事を引き継ぎ、その役割をきちんと果たしている。

それに比べて、俺は一体何をやっているのだろうか……。

俺は滅入る気分を抱えたまま、その場を後にした。

そして、次の日……。

俺はこの馬鹿貴族に、とんでもない目に合わされることになったのだった。

「ヒロ＝ライナードはご在宅か？」

どんどんと乱暴に自宅のドアが叩かれる。

俺はまぶしい朝の日差しに目を細め、低血圧で最悪の気分のままドアへと向かった。

あまり立て付けも良くないし、壊れたら誰か修理費を持つと思っているのか。

苛々（いらいら）しつつ俺がドアを開ければ、そこには朝一番から見たくもない顔があった。

「これは、ダグラス様。早朝からこのような場所に一体何よう？」

ユーリイが市場に出かけていてよかったと思う。

目などつけられてはたまったものではない。

スライサー捜索から俺をはずしておいて、今さら何の用があるというのか。

壁にもたれかかり、嫌みたつぷりで発した俺の言葉に、ダグラスはすつと右手を挙げて、とんでもないことを言い放った。

「ヒイロライナード……いや、スライサーっ！ 連続殺人容疑で、お前を逮捕するっ」

俺は思わずあんぐりと口を開けた。

一体この馬鹿貴族は何を言っているのだろうか？

ちよつと待てと俺は狼狽したが、捕らえよとダグラスの指事に従い、従者達が俺を拘束した。

振り払うことは簡単だったが、事はそう簡単にはいかない。相手は貴族なのだ。

下手に逆らったら、ユーリイにまで手が及ぶ可能性がある。

俺は努めて冷静に、誤解であることをダグラスに伝えようとした。

「濡れ衣です。俺はスライサーではない。第一俺はスライサーと交戦して怪我をっ」

「それを見た者、立証できる者はだれもいるまい？ 目撃者はことごとく死亡しているのだから。被害者のカルザスマツケローニ……お前はあのものに先の試合の決勝戦で惜しくも敗れたそうだな？ 他の被害者も、一度はお前と手合わせをしたことがあるというではないか」

「それは、俺が公式剣術試合に頻繁に出ていたからであって……」

「万年二位のヒイロライナードと、地元では有名なわけではないか。試合に負けた怨恨による闇討ち、愚かな行為に走ったものよ」

「ちがつ……」

口答えしようとした俺は、髪を掴まれ従者達に地面へと顔を押しつけられる。

口に入った土をぺっとはき出し、後で覚えていると俺は唸った。

「先日亡くなった師団員のアーヴィンだったか……団長としての資質は、貴様より上だったとの評判だったそうじゃないか。団長の地位を追い落とされることを恐れての犯行と考えれば、全てつじつまがあつというものだ」

そのダグラスの言葉に、俺は怒りで目の前が真っ赤になった。

肩が痛むのも忘れて、押さえ込んでる従者達をなぎ倒す。

他の従者達が飛びかかってきたが、するりとかわすと頭をつかんで壁にがんと押しつけた。

ずりずりと従者の身体がくずおれ、壁に鼻からの出血の後が筋状に残る。

「取り消せ……」

「ひっ、お、おお、お前達、何をやっている。さっさと、こいつを取り押さえっ」

「取り消せと言ってるんだっ！ この馬鹿者があああっ」

ダグラスの右頬に俺の拳がめり込んだ。

ひぎゃっと情けない悲鳴と、折れたダグラスの前歯が空を舞う。

ダグラスはどしんと尻餅をついて、腰を抜かしたのか這いずるように俺から逃げようとした。

その後のことは良く覚えていない……。

ダグラスの部下である従者達をことごとくぶちのめし、ダグラスをしこたま殴って、首を掴み上げていたときに、騒ぎを駆けつけてきたデイルの姿を見た気がした。

ぼつぽつと振ってきた雨が頬をぬらし、我に返った俺は周囲の人垣へと目をやった。

そこには、お腹の大きい女性……アーヴィンの妻がいた。

「人殺し……」

涙を瞳にためて、アーヴィンの妻は憎しみを込めて俺を罵った。

俺は愕然として、ダグラスを地面に降ろす。

自分の血に汚れた手を見下ろし、俺は失笑した。

今の自分の姿は、そういわれても仕方がない。

アーヴィンが今ここにいたら、俺の姿になんと言うのだろうか。

街の人々の恐れを含んだ視線が、俺に突き刺さる。

俺はがくりと地面に膝を突き、疲れたように暗く曇った空を見上げた。

独房には、ぴちよんぴちよんと水滴が落ちる。

俺は独房のすみで膝を抱えて、その落ちる水滴を数えていた。

ここに入ってから、たぶん3日は経っているだろう。

窓もなく外の状況が解らない以上、相当時間感覚が狂ってきている自覚はあるが。

「俺はこれからどうなるんだろうな……」

デイルが必死でダグラスに弁解していた。

しかしダグラスは俺がスライサーである説は、決して覆したりないだろう。

ダグラスにとっては、誰が犯人であろうとかまわないのだ。

俺を犯人に仕立て上げ、後でたどり着いた増援部隊の隊長に、鼻高々で報告すれば、それで奴の目論見は達成する。

冤罪などと言うことになれば、ダグラスの面目は丸つぶれになるのだから、増援部隊が到着する前に、意地でも俺を犯人と言うことで処刑してしまいたいはずだ。

「これだから貴族は嫌いなんだ……」

このまま何もできないまま、俺は終わるのか。

アーヴィンの仇も取れないまま、無実の罪を着せられて……

せめてスライサーに一矢報いたかったと、俺は拳を握った。

しかし、いまさらどうしようもない。俺の浅慮さが招いた事態だ。

かつん、かつんと足音が響く。俺は伏せていた顔を上げる。

「随分と、うちひしがれておいでですな」

「貴方は……セイレン殿か」

意外な来客に、俺は目を見開く。

メディアの執事であるセイレンは、深々と一礼した。

相変わらず、モノクルの奥の灰色の瞳は何を考えているか全く読めず、極めて無表情だった。

なんというか、一分の隙すら見あたらない。どうにも、俺はこの

執事が苦手だと思う。

「メディアは大人しく実家に帰ったのか？」

「いいえ、スライサーからミレー又様の剣を奪い返すため、まだこの12区にとどまっておいでです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さも当然そうに返すセイレンに、俺はため息をついた。

年端としはもいかない自分の主が殺人鬼を追いかけているというのに、この執事は一体何を考えているのだろうか。無理矢理にでも実家に連れ帰るべきだろう。

「メディアお嬢様より、伝言を承つげつて参りましたので」

「ほう、俺に何が言いたいと？」

「では、お伝えさせて頂きます・・・・・・・・」

セイレンは懐から出した手紙を開き、こほんと咳せき払いする。

「くおおの、大間抜けえっ！ 一体何をしているのです？ また一人突っ走って、痛い目見たのですか。全く貴方という人は・・・・・・・・」

「」

「い、いや。セイレン殿・・・・・・・・悪いがメディアの声色を真まね似て言おうとするのは、やめてくれないだろうか。さすがに気持ち悪いと俺は思う」

「かしこまりました・・・・・・・・」

何事も無かったように声色を元に戻すセイレンに、俺は冷や汗をかく。

真面目な奴かと思っていたが、以外とお茶目属性なのかも知れない。

セイレンは淡々^{たんたん}と外の近況を伝える。

「スライサーのアジトをヒロ口様の同僚であるデイル様が発見した模様。ファウロ侯爵家の者に進言したようですが、取り合ってはもらえなかったようです」

「デイルが？ そうか……」

俺はちつと舌打ちして指を噛む。

ダグラスにとって今さらデイルの報告は都合が悪い。それで無視を決め込むつもりなのだろう。

「デイル様は、ヒロ口様の無実を信じる者数名と、スライサーを討伐するため襲撃をかけるつもりのもりのようでございますが」

「無茶だつ、相手はあのスライサーだぞ。闇雲に突っ込んででも犬死にするだけだ」

俺は牢の鉄柵をつかんで、激昂した。

このままではアーヴィンだけではなくデイルまでもが犠牲になってしまう。

なんとしてでも、早まった行為を諫^{いび}めなければならなかった。

しかし、現在俺は牢の中……自分の軽率さが恨めしいっ。

セイレンは口元に手を当て、ふむつと頷く。

「ひょつとして、そこからお出になりたいのでしょうか？」

「出られるものならばなつ。ああ、こうしている間にもデイルは……」

焦^{あせ}る俺とはうらはらに、セイレンは非常に落ち着いていた。

やれやれと肩をすくめ、どこから出したのか、ナックルガードのついたハンティングナイフがセイレンの両手にあり、俺は怪訝^{けげん}な顔

をする。

「何をするつもりだ？」

「メディアお嬢様が自身のプロミス・ユーザーであると見込まれた方が、脱出を望まれておりますので、不肖この私めがお手伝いいたしましょうかと」

「手伝うだと？ そんな小さなナイフでどうやって俺を脱出させっ
……」

わずかに銀線が走ったように見えた。

からん、からんとすつぱりと切れた牢屋の鉄柵が石畳に転がる。鮮やかな切り口に、俺は戦慄を覚えた。ただの執事ではないのかと、俺はセイレンを見る目が変わっていた。

セイレンはたいしたこともなさそうに、袖元にハンティングナイフを隠す。

「さて、これで脱出可能でございます。お急ぎを……」

「あ、ああ……」

俺は狼狽えつつ牢を出る。

外に出る途中、気を失って倒れている見張りとすれ違った。

そこで、俺はようやく思い至る。俺との面会をゲイルグが許すはずもない。

セイレンはどうやって、俺の所までやってきたのだろうか？

「問題などありません。ばれなければいいのです」

「恐ろしいことを、こともなげに言うんだな……」

「非常時ですので。些末な問題など後々どうにでもなるものです」

この執事あってメディア有り。いや、あのメディアあってこの執

事有りなのか。

どちらにしても、普通の貴族とは何かが違うように俺には思えてきた。

俺は引っかかっていたままの疑問を口にする。

「プロミス・ユーザーとは一体何なんだ？ メディアも前に口にしていたが……」

森の中を巡回する見張りから隠れるように、俺たちは木の陰に隠れた。

俺の問いにセイレンはクワイエットと呟く。たしか、古語で「黙れ」と言う意味だったか？ 昔学校でそう習った気がする。うる覚えだが……。

見張りが遠ざかったのを確認し、セイレンは俺に向き直った。

「私から申し上げると、メディアお嬢様からご不況を買いそうなのですが、時や場合を選んでいる状況でも無いのでしょうか。簡単に説明させて頂くならば、プロミス・ユーザーとは剣の主、約束されし契約者ということですよ」

「それと俺が何か関係あるのか？」

「もちろんですとも。メイカーとユーザー……この二つがそろって始めて一対となるのです。メディアお嬢様はクラインヴェル家の直系の姫であらせられる上、稀代きだいのソード・メイカーでございますれば、しかるべきプロミス・ユーザーをお迎え頂き……」

「ちょっと待ってくれ。言っていることがちんぷんかんぷんで、さっぱり解らないんだが」

「今は解らなくとも、いずれ戦場にて嫌でも思い知らされる時が来ます」

それ以上、セイレンは何も語ってくれなかった。

禍々（まがまが）しき剣を持つスライサー、プロミス・ユーザー・
……そしてソード・メイカー。

断片的な情報は、まだ一つの形にはなっていない。一体俺の周りで何が起こっているのだろうか？ 最初はただの貴族の子供の馬鹿げたごっこ遊び、メディアの言うことは妄想の設定なのだと思うていた。

「全ての問いの答えは戦場の中に……」

謎めくセイレンの言葉に、とりあえず頷く。

解らないことは、今は解らないままで良い。

いずれ知るべき時が来たら、知ることになるのだろうか。

スライサーを倒して決着をつける。

それだけを今は考え、俺はセイレンの背を追って森の中を疾走した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7056z/>

ARMS MAKER'S 刃の姫

2011年12月24日12時45分発行